



繁田 穂波 SHIGETA HONAMI

水棲生物作家

青森県弘前市生まれ

専門学校を卒業後、新人漫画家として週刊連載を開始。連載終了後は細密画の展示会を中心に画家として活動を始める。水棲生物をモチーフに水干(すいひ)絵具を塗り重ね、絵の具の層を彫って描き「その生命から感じ取る息吹」を線にのせて表現している。

WEB <http://shigeta-honami.com/>

[@shige_hnm](#) [@shigeta_honami](#) [@shigeta.honami](#)

相良 菜央(以下 菜央) 穂波さんの絵を見たとき、優しさが伝わってくる絵だと思ったんです。私も小さいころから、人も海も地球も丸ごと全部、優しさという温かさで包みたい、未来に向かっていかなって明るい未来に一步ずつ歩んでいきたいと思っていました。穂波さんの絵からは、海のぬくもりや命の尊さ、温かさ、優しさ、心の慈しみがすごく伝わってくるんです。クジラの体の曲線だったり、色合いだったり。青も単一じゃなくていろいろな色で、本物の海のように。ぬくもりあふれたタッチで表現されていたので、アイサーチの30周年の絵を描いてもらいたいと思って声をかけました。

穂波(以下 穂波) そう言っていただけで嬉しいんです。自分が何かを発信するときはネガティブなメッセージではなく、ポジティブに伝えていくことを心がけています。「なんでこうなっているのかな」の疑問を持ってもらうためには、ポジティブな発信が大切だと思うんですよね。あれダメ、これダメだと人は喜ばないので、そうじゃなくて人が興味を持てるような発信をすることが、いちアーティストとしてできることかなと思ってます。深刻な問題ではあるけれど、悪い方面に捉えられないようなものを作りたいなと。

穂波 キービジュアルでは、円を描くように生き物が循環していく様を表しています。中心に向かっていくにつれて大きな生き物からだんだん小さい生き物へ行くんですけども、その中心にヒトがいます。進化していった時のつながりやコミュニティのつながりなど、ヒトというのはいろんな生き物に支えられて生きていくと思うんです。

菜央 個人的な見解ですが、つながりって3つあると思うんです。1つ目が『人と人とのつながり』、2つ目が『人と自然のつながり』、そして『時のつながり』。この3つのつながりの中で、どの人もこの地球という星でみんなと一緒よに生きているんだって思うので、今回のキービジュアル『イノチノツナガリ』の中に多くのつながりを入れてもらえてすごく嬉しいです。

穂波 イルカ・クジラの中には、ご先祖さまたちもいます。実は古生物を描くのは初めてなんですけど、パケキタスは絶対入れたいなと思って、あとはドルドン、パシロザウルスを入れました。現存していないので、学術的にどれが正しいのかわからないところではありますが、進化があったから今の生き物たちがいるということをしつかり伝えたかったんです。イルカ・クジラたちは同じ方向に向かって泳ぐように描いています。つながりの中で、目指すべき未来に向かって進んでいく様を表しました。

菜央 すてきですね。それに、イルカ・クジラだけじゃなくて、30周年にちなんで30種類の生き物を描いていただいたんですよ。プラントクトンも入れてほしいです。イルカ・クジラたちや他の生き物たちもそうですけど、支えてくれる命あつてこそ私たちというのをすごく大切にしたいなって思うので。

穂波 はい、私たちが普段意識していないような小さな生き物もいますけど、その生き物がいなければ生きていけないと思うんです。なので、プラントクトンやイカも入れて食物連鎖というつながりも入れました。

★ウェブでは対談の続きを公開中！
キービジュアルの制作秘話や2人のイルカ・クジラや地球への想い、『伝える』ということへの想い…など。こちらぜひご覧ください。



設立30周年メッセージ

命のつながり

アイサーチ・ジャパン代表 相良 菜央 × 水棲生物作家 繁田 穂波
対談インタビュー



30周年キービジュアル「イノチノツナガリ」

アイサーチ・ジャパン設立30周年のメッセージ『命のつながり』を水棲生物作家の繁田 穂波さんに描いていただきました。キービジュアル「イノチノツナガリ」に込められた想いとは、どのようなものでしょうか？アイサーチ・ジャパン代表 相良 菜央が繁田さんにお話を聞きました。



アイサーチ・ジャパン代表 相良 菜央